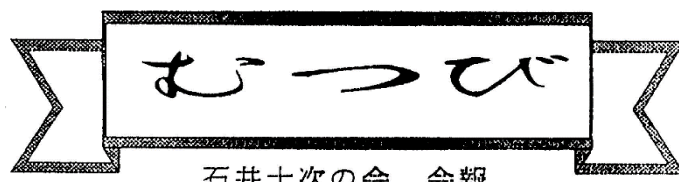


2025 年
(令和 7
年)



339 号

くろみず ちょうへい
黒水 長平 その 2

—石井十次を支えた先人たち—

むつび編集委員 石川 正樹

(6) 高鍋の養蚕業と茶臼原孤児院

明治 13 年、高鍋の^{たけはらゆうきち}竹原祐吉は、^{いなくらつねのり}稲倉恒徳、石井万吉と相談して「養蚕会社設立計画」を発表し同志を募った。黒水長平も設立に加わった。合わせて 92 名が応じ、共同で 1150 円を出資した。会社名を「高鍋養蚕社」と名づけた。
^{たかなべようさんしゃ}

黒水長平は桑苗を求めて飢肥に出張し 25,000 本を求めて、馬場原に植え付けた。同年 5 月には、座繰り^{ざぐ}機械を入れて製糸を始めた。生糸 1 貫 420 匁を得て、京都高島屋に売却し、代金 71 円 71 銭を得た。これが高鍋における国内生糸輸出の最初であった。



明治 14 年 3 月、高鍋養蚕社では桑苗 20,000 本を買入れ、石井万吉邸で養蚕し、見学者を受

け入れた。明治 17 年、黒水長平は、十次の義兄・岩村真鉄^{まがね}らと共に、「高鍋授産場」を設立した。明治 19 年には蒸気機関を導入して機械による製糸を始めた。

石井十次は、父・万吉が養蚕業の先覚者であった関係から、養蚕業に関心をもっていた。茶臼原に孤児を移したころから、茶臼原の開発に桑を植え、養蚕業に乗り出そうと考えた。義兄・岩村真鉄^{まがね}も養蚕業には詳しくかったので、第一次茶臼原開発のときから桑を植えた。その後十次の努力の甲斐あって、十数町歩の桑園が広がった。孤児院の女子に座繰りの製糸の稽古をさせた。こうして茶臼原孤児院では養蚕業が主要な仕事となった。十次は機械製糸事業を目指した。

明治 44 年、十次に高鍋製糸会社の社長就任の要請が舞い込んだ。十次は三女・基和子を亡くして悲嘆にくれていたが、「基和子の弔い合戦」のつもりで引き受けた。長平や真鉄の応援もあった。十次は経営能力を発揮して、京都・^{ぐんぜ}郡是製糸会社の^{はたの}波多野社長の指導も受け、合理的な経営を行い、会社を軌道に乗せた。しかし大正 3 年、十次は体調不良から社長を辞任した。製糸会社の社長業は、十次にとっても重圧であった。その後まもない大正 3 年 1 月に十次は亡くなった。

黒水長平は、十次の死の翌年、大正4年8月、病を得て永眠した。享年64。

(7) 長平の人となり

高鍋出身の参議院議員・平島敏夫は、長平について次のように語っている。

「少しも身边を飾らぬ、そして俗事に全く無頓着な、飄逸^{ひょういつ}というか、超然^{ちょうぜん}というか、いわば悟りきったといった風の人であった。臭味^{くさみ}のないクリスチャンで、大輪の朝顔の鉢作りの名人で、花の盛りにはよく父に連れられてお宅へ訪ねた。いつもニコニコして、この人こそ怒るということを知らない人という印象が残っている。何人^{なんびと}にも親切で、いわゆる陰徳^{いんとく}を積まれた方であり、弟さんたちに較べれば、凡人であったかもしれないが、私は人間として立派な人格者であり、高鍋の先哲の中に、この長平さんも弟さんたちと加えられるべき人物である」

三男・左都夫は長平について、

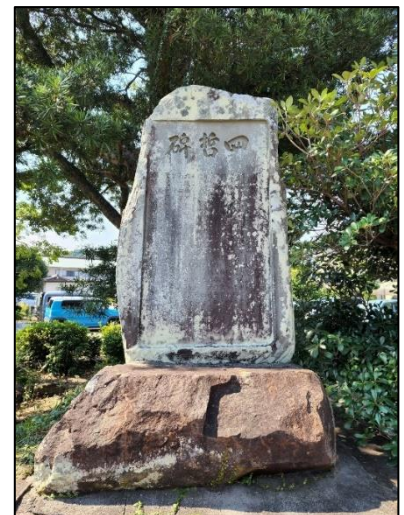
「自分と馬左也が遠国に遊学するときなど、いつも消極的で奮発心が足りないとこの兄を思ったことがあったが、今にして思えば、人間的な人柄という点から考えれば、自分など遠く及ばないと思う」

(8) 四哲碑^{してつひ}

昭和31年、高鍋町長・柿原政一郎は^{いかだ}筏地区の黒水長平生誕の地に「四哲碑」を建立した。碑文は歌人で郷土史家^{やすだなおよし}の安田尚義が書いた。

「この^{ところ}処は高鍋藩の重臣秋月種節の旧邸なり。その四男^{ことごと}悉く^{ここ}茲に生る。長は水筑弦太郎、秋月家の旧姓を冒す。気節^{きせつ}あり。若干^{じゃっかん}維新の志士として江戸伝馬町^{てんまちょう}の獄に死す。次は長平、黒水家を^つ嗣ぎ、寛厚大人の風あり。郷土に在^{ふうきよう}って殖産と風教^{ねん}を念とす。大隠は市に隠るるの例か。三は左都夫、フランス法学者、後外交官として大使に進む。硬骨^{こうこつ}にして我が外交界の長老なり。大東亜戦の非なるに及び、邦家の前途^{ほうけ}を深慮^{しんりょ}し、身を以て和平運動の先駆者となる。四は馬左也、鈴木家を^{まさや}嗣ぐ。初め内務官吏、後、住友

本店総理事となり、経営一新、常に国家的見地に立ち、士魂商才^{しこんしょうさい}を説く。人格識見財界西^{とうりよう}の棟梁^{きぎ}たり。ああ、四哲^{ごうこく}ここに喜戯^{いざい}し、長じて郷国の偉材^{よくんなが}となり、余薫永く尽くるなし。即ち碑を建て後進^{すなわ}の奮起^{ふんき}を促^{うなが}すと云。昭和三十一年六月、題額^{だいがく}秋月種英公、宮崎県文化専門委員会議長、安田尚義撰並書」



四哲碑

石井十次生誕 160 年記念岡山・倉敷研修旅行に参加(後編)

編集委員長 竹之下悟

標題の研修旅行に「石井十次の会」枠で参加させていただいた。

9月29日～10月1日までの3日間。

往路車中で児嶋草次郎理事長から友愛社職員に3つの課題が提示された。

それならばと自分なりの課題を設定することとした。

- | |
|---|
| <ol style="list-style-type: none">1 なぜ十次は支援熱き岡山の地を断ち切り茶臼原大地に理想郷を2 児嶋理事長と友愛社職員の関係性を覗き見したい3 むつび編集委員長としての役割を現地で果たしたい |
|---|

2と3については前回11月号4頁に記した。

ので、今回は1についてのみ記すこととしたい。

岡山県倉敷の地は大原孫三郎を中核とする大原ファミリーの巨大な財閥体のエリアでもある。

石井十次の絶大な支援者である大原孫三郎。

学生時代は放蕩生活で今でいえば5千万円もの借金生活だったと。

その孫三郎が十次主宰の音楽幻灯隊での演説等に強い感化を受け改心もし肝胆相照らす仲となる。

その経緯は既知のことではあったが大原孫三郎の実業家としての活躍はすさまじい。社会福祉・文化事業・医療事業・電力・報道と広がりとし深さは俗人の想像を超えている。

そのことは現地を訪れたからこそその「百聞は一見に如かず」を痛感。

物心両面からの絶大なる支援者・大原孫三郎が居住する岡山県倉敷の地。その岡山の地を断ち切り茶臼原大地を十次は目指す。

「岡山の地だと自然と一体となった自給自足の生活や教育との自立が難しい。それができる所こそ茶臼原大地。理想郷。」

もちろん岡山では大反対の合唱。

孫三郎は事業家としての判断も働かせ「移転やむなし」と理解を示す。

なぜ理想郷が茶臼原大地？ それは謎である。が、容易に推察も。

そうなのだ。鮭が産卵し生涯を終えるために本流を目指すように十次にも帰巢本能も強く働いているのだろう。茶臼原大地は十次の故郷。

そして、茶臼原大地周辺にも十次を支える先人たちや仲間・理解者が確実に存在している。

さらには、自然と一体となった茶臼原の地に「茶臼原の気」の存在をも児嶋理事長は指摘される。「真理を追求すべき理想郷」として十次を茶臼原大地へ駆り立てる「気」。

理想郷であり故郷であり「気」の茶臼原。だからこそ茶臼原大地。その考え方が自分なりの課題1に迫る回答としてしっくりくる。

とてもとても貴重な3日間の研修旅行であった。

石井十次生誕 160 年記念岡山・倉敷研修旅行～児島虎次郎記念館～

私は 9 月 29 日(月)～10 月 1 日(水) 研修旅行に会員として参加した。これまでに何度か大原美術館、東洋館、大原本邸、有隣荘(特別公開)、加計美術館を見学したことがあった。しかし、その当時はまだ「児島虎次郎記念館」は公開されていなかった。大原孫三郎が 1922 年に創設した銀行建築を記念館として再生されることになっていた。

児島虎次郎は、実業家・大原孫三郎の経済的支援で、1908 年にヨーロッパに留学。3 度の渡欧を通じて西洋の優れた美術品を、エジプトや西アジアからは古代の美術品を収集し大原美術館開設の基礎を築いた。児島虎次郎は石井十次の娘婿。児嶋草次郎理事長の祖父。館内に展示されている写真がよく似ておられた。何度も拝見して感動した。

9 月 30 日(火)大原美術館は作品展示入れ替えの為、休館となっていたが交渉し、児島虎次郎記念館のみ特別に開館していただいた。大原孫三郎と石井十次と児島虎次郎の信頼と友情の絆は、次の世代にもしっかりとバトンが引き継がれているのだと感じた。どの作品も素晴らしくまた再訪したいと思った。印象深かったのは油絵「デッキ・パッセンジャー」。この作品は「児島虎次郎もうひとつの眼-高梁市成羽美術館編」の中に虎次郎が撮影した写真を基に描かれたと思われる。虎次郎は写真家としても優れていた。私は数年前に虎次郎の故郷にある高梁市成羽美術館を見学した。建築家・安藤忠雄氏設計のコンクリート壁と周囲の緑が調和して美しい景観だった。虎次郎の作品を展示し遺徳を顕彰するモダンな美術館のことを思い出した。



記念館入口のポスターを見て心が躍った！

Grand Open !
児島虎次郎記念館
2025 年 4 月 3 日

4 月 3 日は虎次郎の誕生日である！

(編集委員 徳地 順子)

《 お し ら せ 》

★新会員ご紹介(敬称略)

【宮崎市】山口 智子 日高 敬子 細田 伸子 【高鍋町】宮川 千明

【美郷町】河内 喜美子 【千葉県】鮫島 正人

★ご寄付をいただきました(敬称略)

【宮崎市】永吉 洋二・智子 【東京都】末藤 直子

＊ここまでの掲載者は編集等の都合により 11 月 20 日までのものとしています。

この会報は、宮崎県を中心に全国 1700 余の個人・団体に毎月送付しています。

☎ 884-0102 宮崎県児湯郡木城町大字椎木 644-1

社会福祉法人 石井記念友愛社後援会

石井十次の会

TEL/FAX 0983-32-4612

メール yuuaisya-jyuujinokai@kijo.jp

編集後記

●巻頭言は石川正樹編集委員の執筆です。

玉稿をありがとうございました。

「石井十次を支えた先人たち」続編の発刊を心待ちにしています。

編集委員 徳地 順子